

首長墳

京都府内の

しゅ
ち
やう

ふ
ん

2026. **3.7** (土)
13:30~16:15
(開場13:10)

京都 JA ビル
B2F 202/203 会議室

舞鶴市 上安久1号墳

上安久1号墳出土 方格規矩鏡

(×鏡字跡)

写真提供：大手前大学

第159回埋蔵文化財セミナー

京都府内の首長墳

日 程

13時30分 開会あいさつ

京都府教育委員会

指導部文化財保護課長 石崎善久

日程説明(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課参事企画調整係長事務取扱 筒井崇史

13時40分 報 告 1

「舞鶴市上安久1号墳の調査」

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課調査第1係主任 荒木瀬奈

14時25分 報 告 2

「国史跡乙訓古墳群・長岡京市井ノ内稻荷塚古墳の調査」

(公財)長岡京市埋蔵文化財センター

事務局長 中島皆夫氏

15時10分 休 憩

15時25分 報 告 3

「国史跡綴喜古墳群と南山城の前期古墳」

京都府教育委員会

指導部文化財保護課副主査 桐井理揮

16時10分 閉 会

主 催 京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

会 場 京都J A会館

舞鶴市^{かみあぐ}上安久 1 号墳の調査

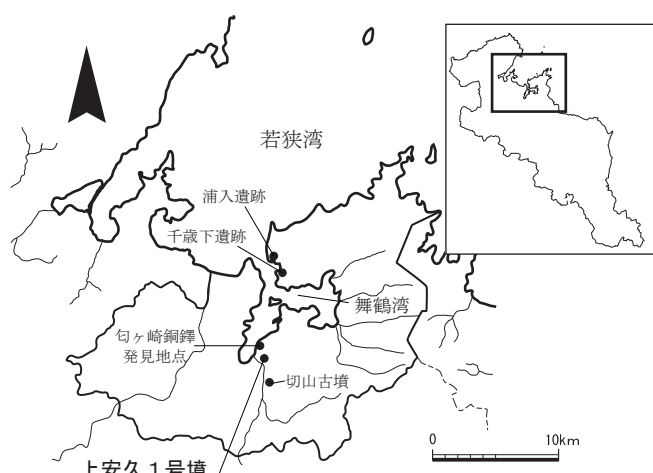
(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 荒木 瀬 奈

1. はじめに

上安久 1 号墳は、西舞鶴の伊佐津川右岸河口部に近接する標高約51mの丘陵上に位置する古墳時代中期前半(5世紀前半)頃に築造された円墳です。

令和5年度から令和7年度に、国土交通省近畿地方整備局舞鶴港湾事務所の委託を受けて、舞鶴港和田地区道路(上安久線)の建設に伴い発掘調査を行いました。上安久 1 号墳は令和6・7年度に調査を行い詳細が判明しました。今回は調査の様子を中心に報告します。

なお、現在は出土品の整理・分析作業中であり、今回の発表での見解は、今後、変更になるかもしれないことをご承知ください。



第1図 上安久 1 号墳の位置

2. 上安久古墳群について

(1) 周辺の地理・歴史的環境

舞鶴湾は日本海に面した若狭湾の西部にあたり、湾の口は狭く、周辺を400～600m級の丘陵に囲まれており、干満差も30cm程度で比較的波浪の少ない穏やかな水面であり、天然の良港と言えます。

このような地理的特徴から、古来より港を利用した他地域との交流が行われていたと考えられます。周辺の遺跡を見ると、湾の入口にあたる浦入遺跡では、約5,500年前の外洋航行の可能な丸木舟や、北陸・山陰などの遠隔地由来の遺物も出土しています。下安久小字勾ヶ崎付近では、弥生時代後期の近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が発見されています。浦入遺跡の南側にあり、海に面する千歳下遺跡では、中国製銅鏡の破片や鉄製品、石製模造品等の古墳時代前半期の祭祀に伴う遺物が多数出土しています。このように古代の舞鶴湾沿岸に



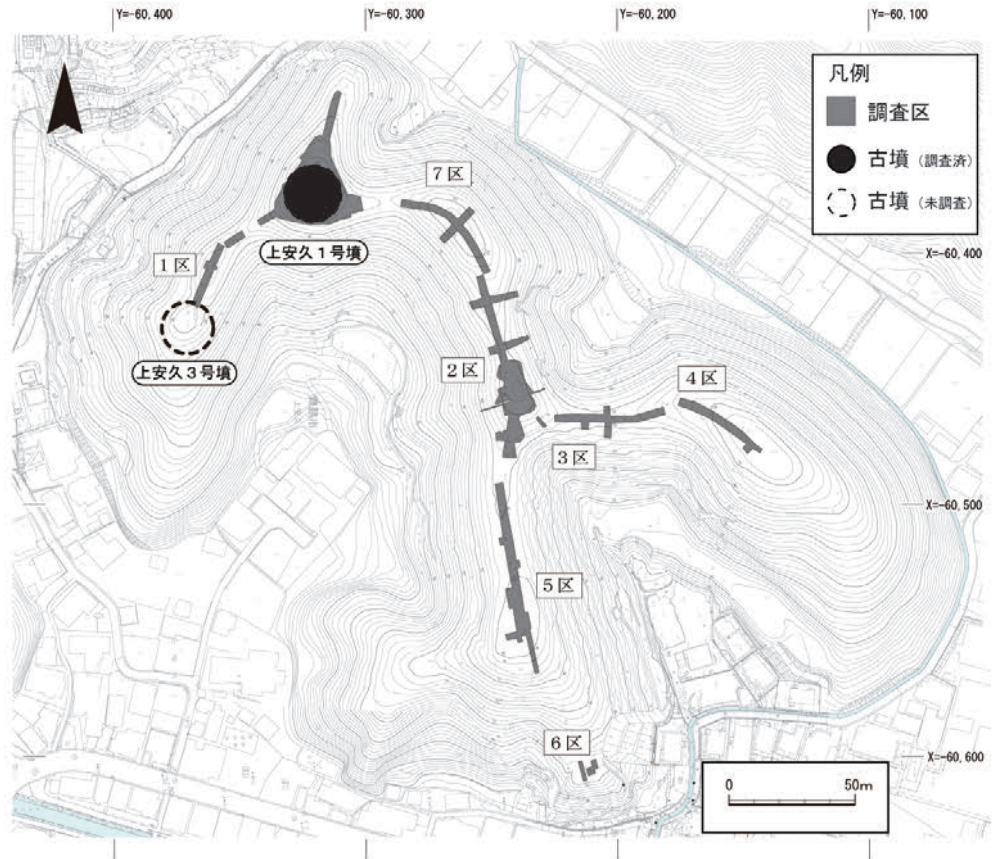
写真1 上安久1号墳上空から西方舞鶴湾・建部山を望む



写真2 上安久1号墳上空から南方西舞鶴市街地を望む

は特徴的な遺構・遺物が出土する遺跡が複数あるものの、前方後円墳等の有力古墳は認められず、前期後半頃に伊佐津川流域に築造された切山古墳以降については、後期に横穴式石室を持つ古墳の築造されるまで様相が不明でした。

上安久古墳群が位置する丘陵上には、調査前には尾根上に3基の古墳・古墳状隆起が確認されてい



第2図 上安久古墳群、上安久城跡調査区配置図 (S = 1/3,000)

ました。また、戦国時代の連歌師である里村紹巴^{さとむらじょうは}の「天橋立紀行」に「安久の城」とあること、周辺の小字名に「陣取^{じんとり}」、「城山^{しろやま}」などとあることから、安久氏が中世に築造した城跡の存在が予想されており、上安久城跡として丘陵全体が遺跡範囲とされていました。

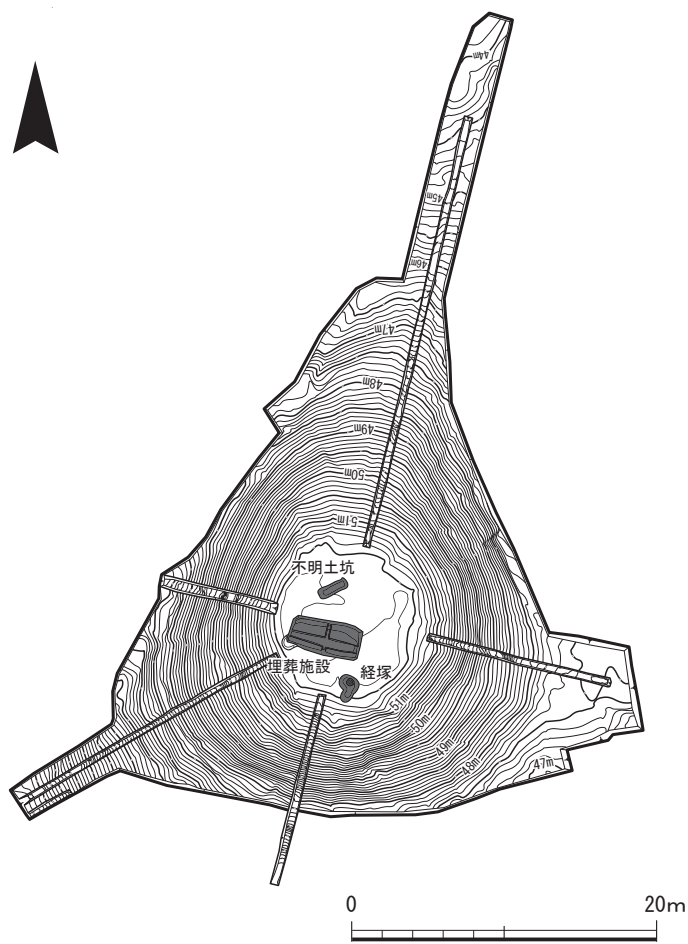
(2)これまでの調査

上安久古墳群では3次、上安久城跡では5次にわたる調査が行われています。丘陵北西斜面で平安時代末から鎌倉時代初頭頃の石組遺構等、南西側に所在した独立丘陵上で曲輪^{くるわ}の可能性のある平坦面5か所を確認しています。これに対して丘陵尾根部では、表土直下で岩盤状の自然堆積層を検出しており、時期の明確な遺構は確認できなかったことから、丘陵尾根上には上安久城は展開しないと考えられます。

古墳としては、1号墳の他に南西側に伸びる尾根の先端に上安久3号墳が所在しています。1号墳と3号墳の間に2号墳の存在が推測されていましたが、調査の結果、古墳の痕跡は確認できませんでした。

3. 上安久1号墳の調査成果

(1)墳丘について



第2図 上安久1号墳墳丘測量図

丘陵頂部に相当する墳頂部からは、南側に広がる伊佐津川流域の平野部や、西側の西港付近が迫り、平野部との眺望と港の出入口を意識した立地と言えます(写真1・2)。

墳形は円墳で、径約27m・高さ約4.5m程に復元できます。墳丘は丘陵を削り、その際に出た土を盛土して築造されています。平野部から見えない北側の墳丘は他の部分の墳丘と比較して傾斜が緩やかであり、裾付近も不明瞭でありあまり整形されていません。墳丘には段築・葺石・埴輪はなく、墳丘裾を区画する溝も確認できません。

墳丘の表土を掘削中に、須恵器片が複数出土しました。墳頂平坦面から南半部に多く分布しており、各破片の大きさは



写真3 上安久1号墳全景(南から)

1～15cm程度です。墳丘が完成した後、人為的に破碎し、墳丘上・周辺に散布されたと考えられます。器種は壺・甕・高杯・器台等があります。

(2) 埋葬施設について

墳頂部平坦面中心付近からやや南寄りの地点で、木棺直葬の埋葬施設を1基検出しました。墳頂部平坦面に木棺を据えるための穴(墓壙^{ぼこう})を掘り、墓壙底部に木棺を設置して埋め戻す構造です。墓壙の平面形は隅丸長方形で、長軸は東西方向で、法量は東西約4.7m、南北約2.3m、深さ約0.6mを測ります。木棺は墓壙の中心ラインからやや南寄りに設置され、形状は側板部分が突出し両小口部分がH型を呈する組合せ式木棺^{くみあわ}と考えます。木棺の大きさは内法で東西約4.5m、南北約0.6m、深さ約0.2mを測ります。

棺内は2枚の仕切板で3つの区画(中央区画・東区画・西区画)に区分されており、それぞれに副葬品が配置されます。中央区画の

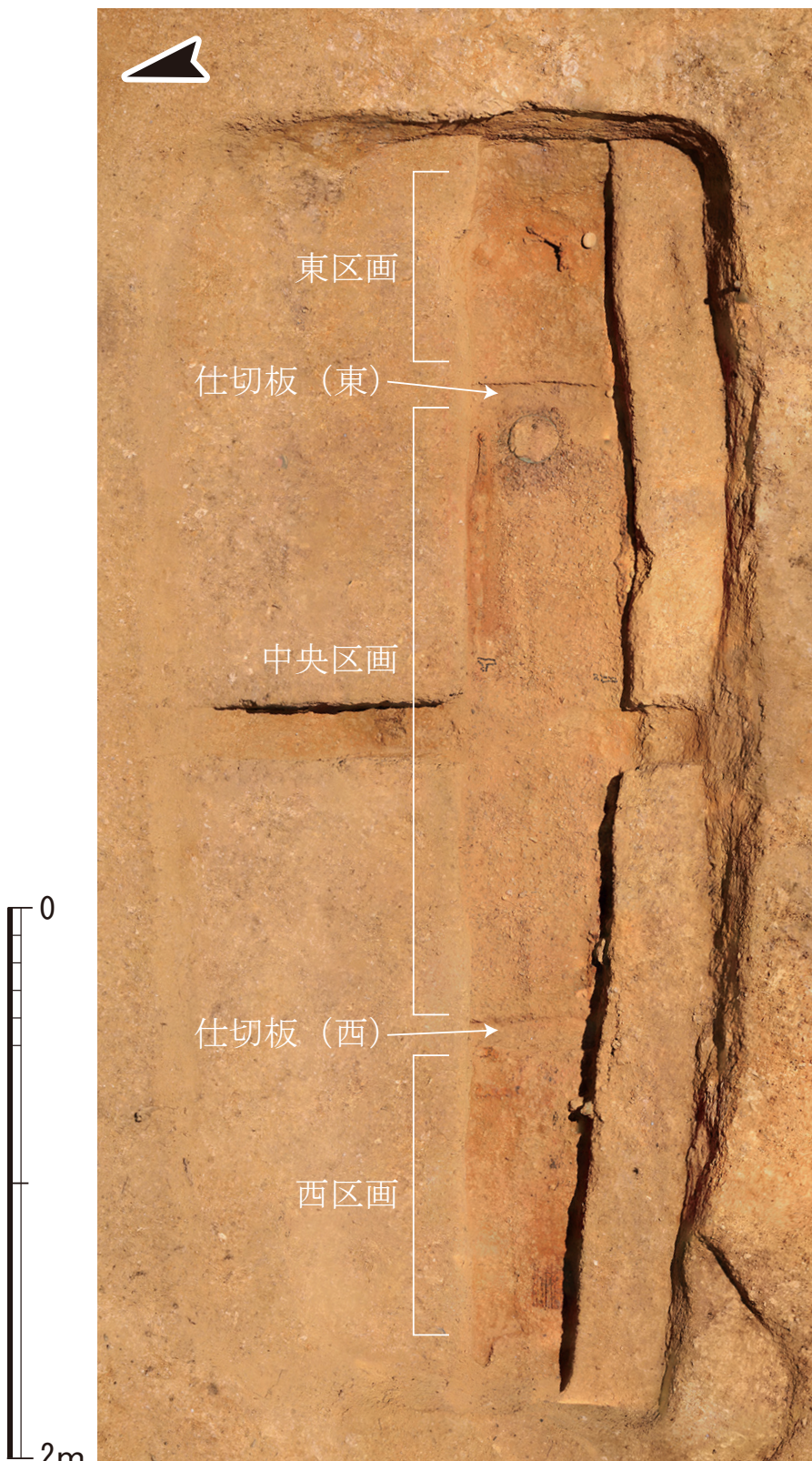


写真4 埋葬施設の状況

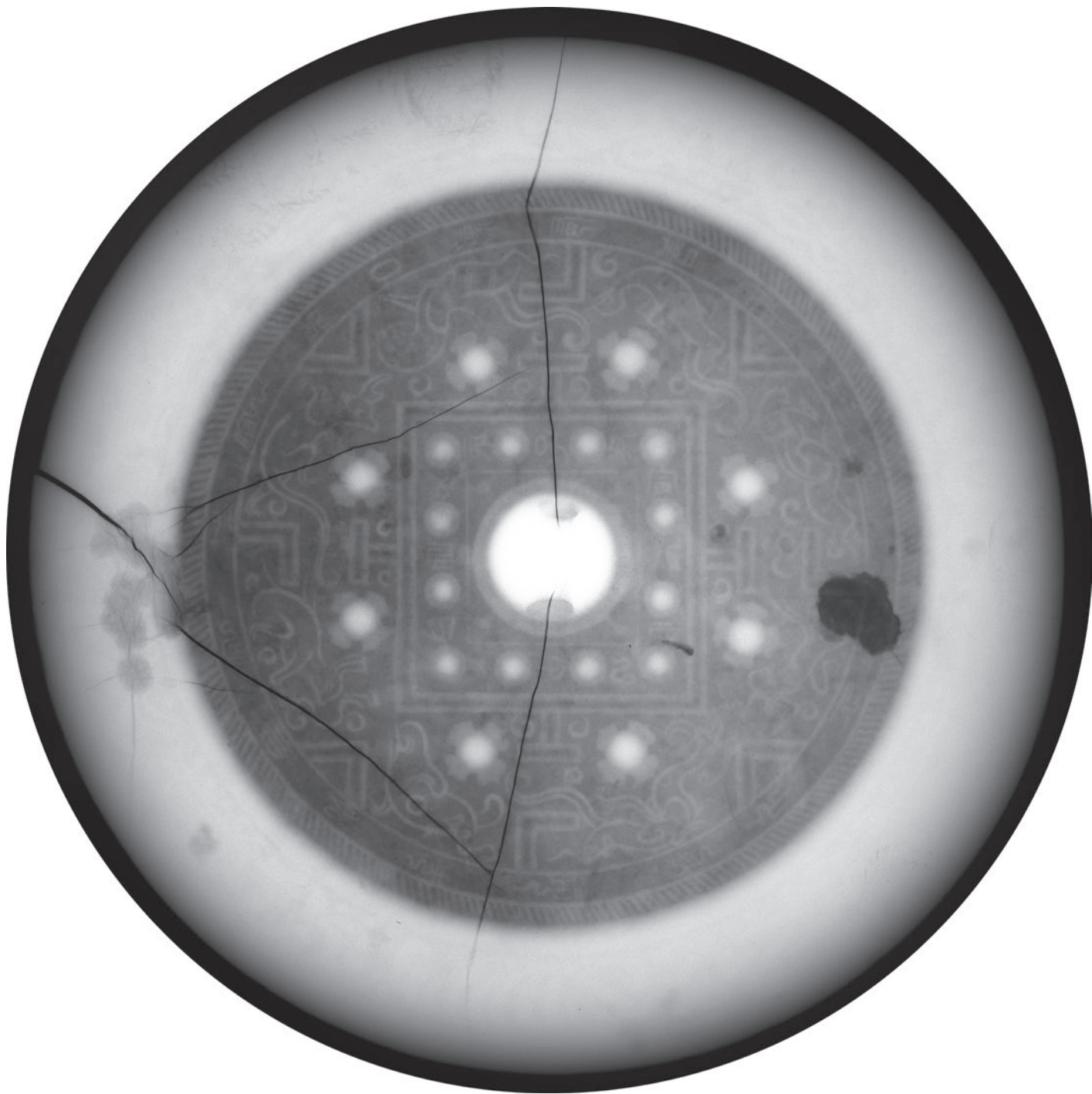


写真5 方格規矩鏡X線画像(実大)

み床面に約1 cm大の円礫で礫敷が施されます。礫敷は東端付近がやや高くなっていることや、後述する副葬品の配置等から、被葬者は中央区画に東頭位で埋葬され、礫敷が高くなっている部分が枕状になり、被葬者の頭部を支えていたと考えられます。

(3) 主な副葬品について

埋葬施設からはさまざまな遺物が出土しました。ここでは、組合せ式木棺内の各部分から出土した副葬品について見ていきます。

①中央区画

銅鏡、^{たてぐし}豎櫛、ガラス玉、鉄刀・劍等が出土しました。

銅鏡は鏡背面を上に向けて斜めに倒れこむように出土したことから、埋葬当時は東の仕切板に立てかけられており、木棺の腐朽に伴って被葬者の頭部付近に倒れたようです。X線写真撮影を行った結果、中国製の方格規矩鏡^{ほうかくきぎきょう}と判明しました(写真5)。面径は約18.6cmを測ります。銘文帯があり、文頭の○印の後に、「漢有善銅出丹陽 取之為鏡清如明 左龍右虎」の18字が確認できます。X線写真のみからの判断ですが、岡村秀典氏^{おかむらひでのり}の分類によると方格規矩四神鏡Ⅲ式に属し、製作時期は前漢末(紀元前1世紀末～紀元1世紀初頭)頃と考えられます。銅鏡が作られた時期から、1号墳に副葬されるまでに400年を超える時期差が認められます。

銅鏡を取上げると、その下から豎櫛が複数個体出土しました。出土位置から被葬者の頭部に装着されていたと考えます。銅鏡に含まれる銅イオンの影響で、櫛の歯も良好に残存していました。

刀劍類は3点あります。被葬者の右腕側の刀は長さ約75cm、左腕側の劍は約55cmで、2点はいずれも把^{つか}を被葬者の頭部側(東)に向けます。左足付近の劍はやや細身で約55cmを測ります。3点とも表面に鞘^{さや}や把の痕跡が残っていました。

ガラス玉は被葬者の首元、両腕、足元からまとまって出土したことから、それぞれ首飾りや足輪などの装身具を形作っていたと考えます。特に被葬者の両手首付近で紺色のガラス玉が連なって出土し、腕輪が装着されていた状態を確認できました。首元と足元のガラス玉は腕輪のものよりも小さいものが使われています。首元のガラス玉は青色と薄い緑色の2種類が確認でき、薄い緑色のものは検出段階ですでに割れて細片となっていました。足元のガラス玉は首元のものと同様の青色のもののみ確認できます。

②東区画

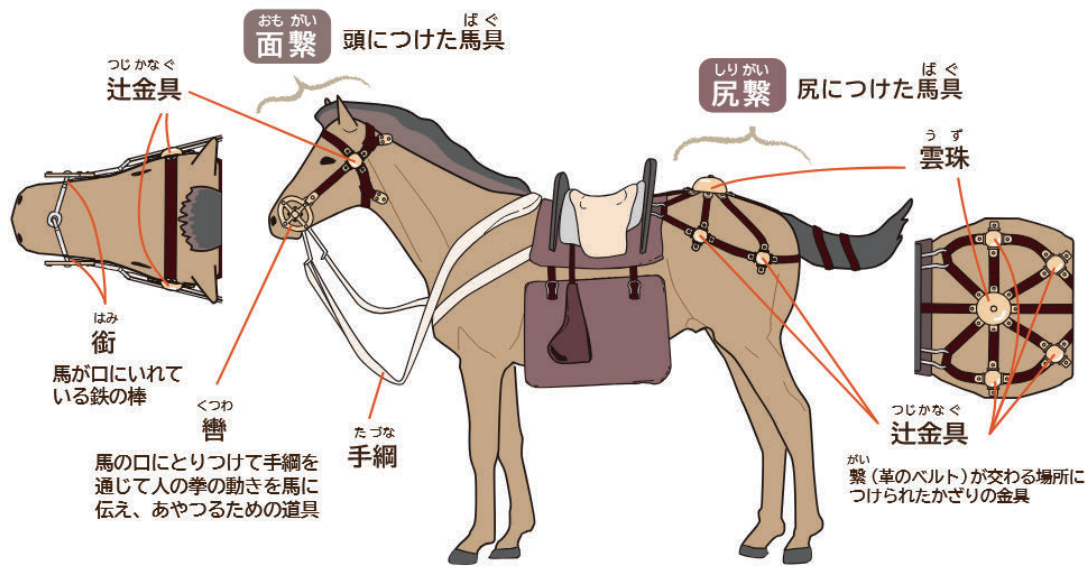
馬具^{くつわ}(轡)と用途不明の円礫が出土しました。

轡^{ひょうぐつわ}は鑣轡と呼ばれる一部に有機質が使われた鉄製の轡で、京都府内では初の出土となります。さらに、日本海側でも最古の馬具の一つとなります。この轡に近接して長軸約7cmの卵形を呈する白い円礫が1点出土しました。調査地付近では見られない石材であり、明確な加工痕はなく用途不明です。

③西区画

長頸鏃^{ちょうけいぞく}、鉄鎌^{てつがま}、滑石製勾玉^{かつせきせいまがたま}、同白玉^{うすだま}、漆膜^{うるしまく}などが出土しました。

長頸鏃は古墳時代中期から出現する頸部が長い鏃で、十数本程が一束になって出土しており、^{ころく}胡籙等の矢を入れる箱^{せいしぐ}(盛矢具)に入れられていたと考えられます。長頸鏃の東側延長線上には



第3図 古墳時代の馬の装い
(京都国立博物館2025「博物館ディクショナリー」245号から転載)

やがら
矢柄か盛矢具の一部と思われる漆膜が面的に広がる状態を検出しました。

鉄鎌は西側の仕切板付近で2点が並行する状態で出土しました。いずれも古墳時代中期に出現する刃先が湾曲した曲刃鎌であり、長さ約15cmを測ります。床面に接する部分に木質が付着します。

鉄鎌の南側では、仕切板付近で滑石製勾玉、同白玉、豎櫛が複数まとまって重複するように出土しました。検出時には滑石製勾玉と大半の白玉は、上に黒褐色の炭化物状のものに覆われており、何らかの入れ物に入れられていた可能性があります。豎櫛の多くは方向にばらつきがあり、やや散乱している状態で出土しました。

④棺外

木棺の外からも遺物が少量出土しています。棺外南側で、木棺痕跡の検出面とほぼ同一面で鉄矛が1点木棺の長軸に並行するように出土しました。矛先は東に向けます。また、墓壙内の掘削を開始して間もない段階で、東側から馬具の一部をなす辻金具と鉸具が数点ずつ出土しました。出土地点は棺内東区画で出土した鑣轡の上部に相当し、同一の馬具のセットとなる可能性があります。

(4) その他の遺構・遺物

墳頂部には、上記の埋葬施設以外にも、中世の経塚1基と時期不明の土坑1基を確認しました。時期不明の土坑は埋葬施設の北側で検出しましたが、時期の明確な遺物や木棺痕跡等は確認できないことから、埋葬施設とは言い切れず、遺構の性質は不明です。

古墳時代以外の時期の遺物としては、表土掘削中に中世の土師器皿片や近現代の陶器片・瓦

片が出土しており、墳丘上は後世の攪拌^{かくはん}を受けていると考えられます。

(5) 築造時期について

墳丘上より出土した須恵器片や、副葬品の特徴などから、1号墳の築造時期は概ね中期前半(5世紀前半)頃と考えられます。また、出土した方格規矩鏡には400年以上の伝世が認められ、どの時期に大陸から伝来し、副葬されるまでにどのような履歴をたどったのかが課題となります。

4. まとめ

今回の調査成果から1号墳についてまとめると、墳丘は段築・葺石・埴輪を持たない一方、未盗掘の埋葬施設からは、中国製で長期間の伝世が認められる方格規矩鏡や、日本海側最古級の馬具の一つとなる鑣轡、最新の型式である長頸鏃や曲刃鎌など、大陸との関係をもうかがわせる豊富な副葬品を持ち、海に臨む古墳の立地とあいまって、大陸との交流によって育まれた日本海文化を担う有力な首長の存在を示すものと言えます。

周辺では、前期後半頃の切山古墳以降、明確な有力古墳が見出せませんでした。上安久1号墳が後続する可能性が高くなりました。また、近隣に位置する祭祀遺跡である千歳下遺跡とも時期が重複する可能性が高く、これらとも合わせて丹後・北近畿の中での古墳時代における舞鶴湾沿岸部の位置付けを考える上で大変重要な存在となります。

上安久1号墳の解釈・位置付けを巡っては複数の検討事項が存在するため、今後の整理・分析作業を通じて理解を深めていきます。

【参考文献】

- 諫早直人2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』 雄山閣
 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆(編)2013『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社
 大阪府立近つ飛鳥博物館2006『陶器の須恵器一年代のものさし』
 岡村秀典1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号 史学研究会
 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
 舞鶴市史編さん委員会1993『舞鶴市史』通史編(上)

銅鏡については大手前大学の森下章司氏に、馬具については京都府立大学の諫早直人氏にそれぞれご教示いただきました。また大手前大学史学研究所に銅鏡のX線写真を撮影・提供していただきました。

メモ用紙

国史跡乙訓古墳群・長岡京市井ノ内稲荷塚古墳の調査

(公財) 長岡京市埋蔵文化財センター 中島 皆夫

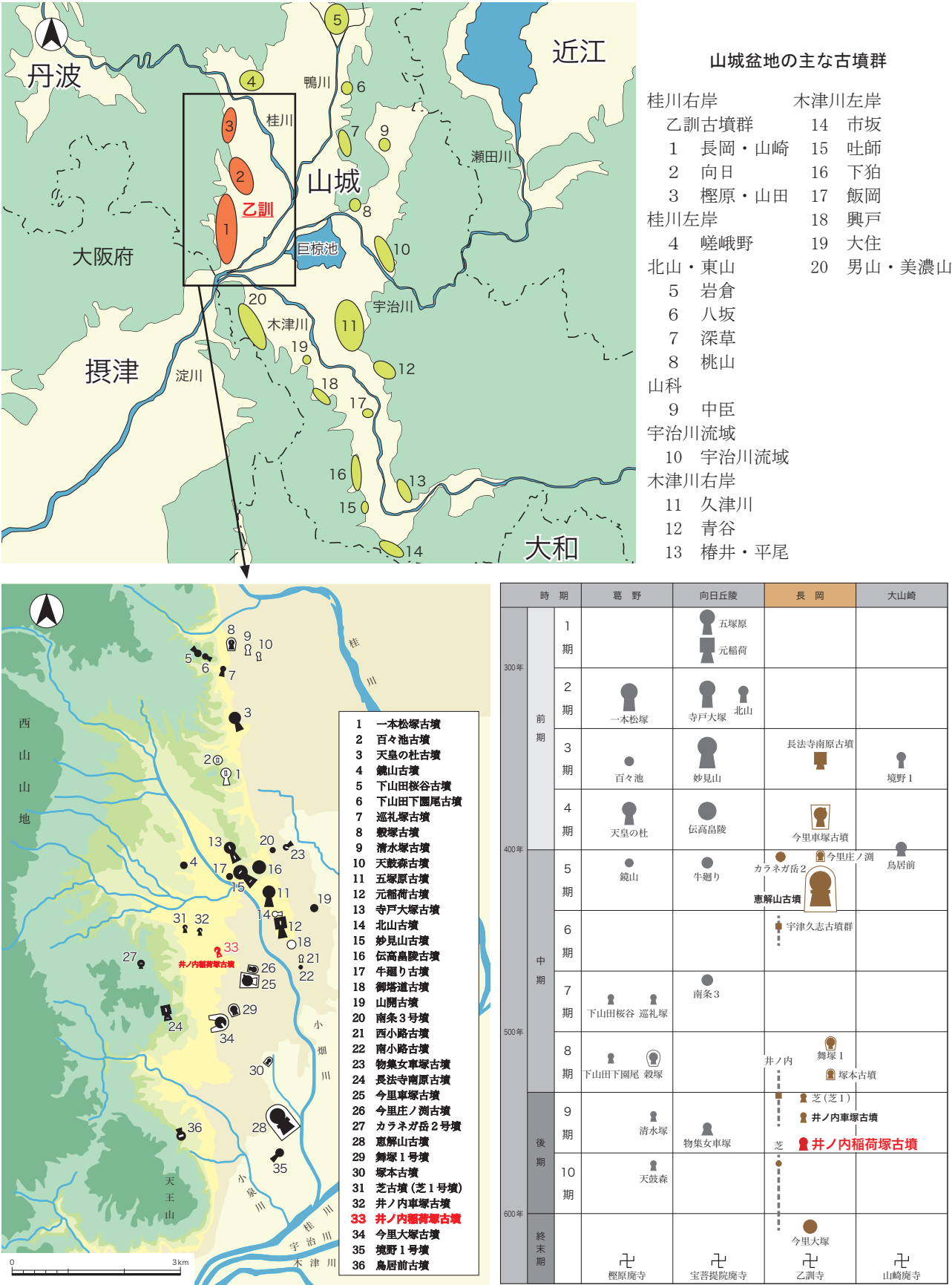
1. はじめに ～井ノ内稲荷塚古墳の概要

長岡京市井ノ内小西^{いのうちおにし}に所在する井ノ内稲荷塚古墳^{いのうちいなりづか}(写真1)は、平成5(1993)年～平成9(1997)年に実施された大阪大学による発掘調査によって、芝古墳^{しば}(京都市)、井ノ内車塚古墳^{いのうちくるまづか}(井ノ内向井芝^{いのうちむかいしば})に継ぐ時期(古墳時代後期前半)に築造された、全長約46mの前方後円墳であることが明らかになっています(第1図)。外表施設としての段築^{がいひょう}、葺石^{だんちく}や埴輪^{ふきいし}列は有していません。埋葬施設^{まいそう}は、後円部に西側くびれ部方向へ開口する左片袖式^{ひだりかたそで}の横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}があり、前方部には組合せ式木棺^{くみあわ}が直葬^{じきそう}されていました(第2図)。

井ノ内稲荷塚古墳の横穴式石室は天井石^{てんじょうせき}が失われていましたが、玄室^{げんしつ}や羨道^{せんどう}の側壁は比較的良く残っていました。井ノ内村に近い古墳の立地や後円部上に小さな社^{やしろ}があったことが幸いしたのかも知れません。



写真1 井ノ内稲荷塚古墳調査前の状況



第1図 山城地域の主な古墳群と乙訓古墳群・井ノ内稲荷塚古墳

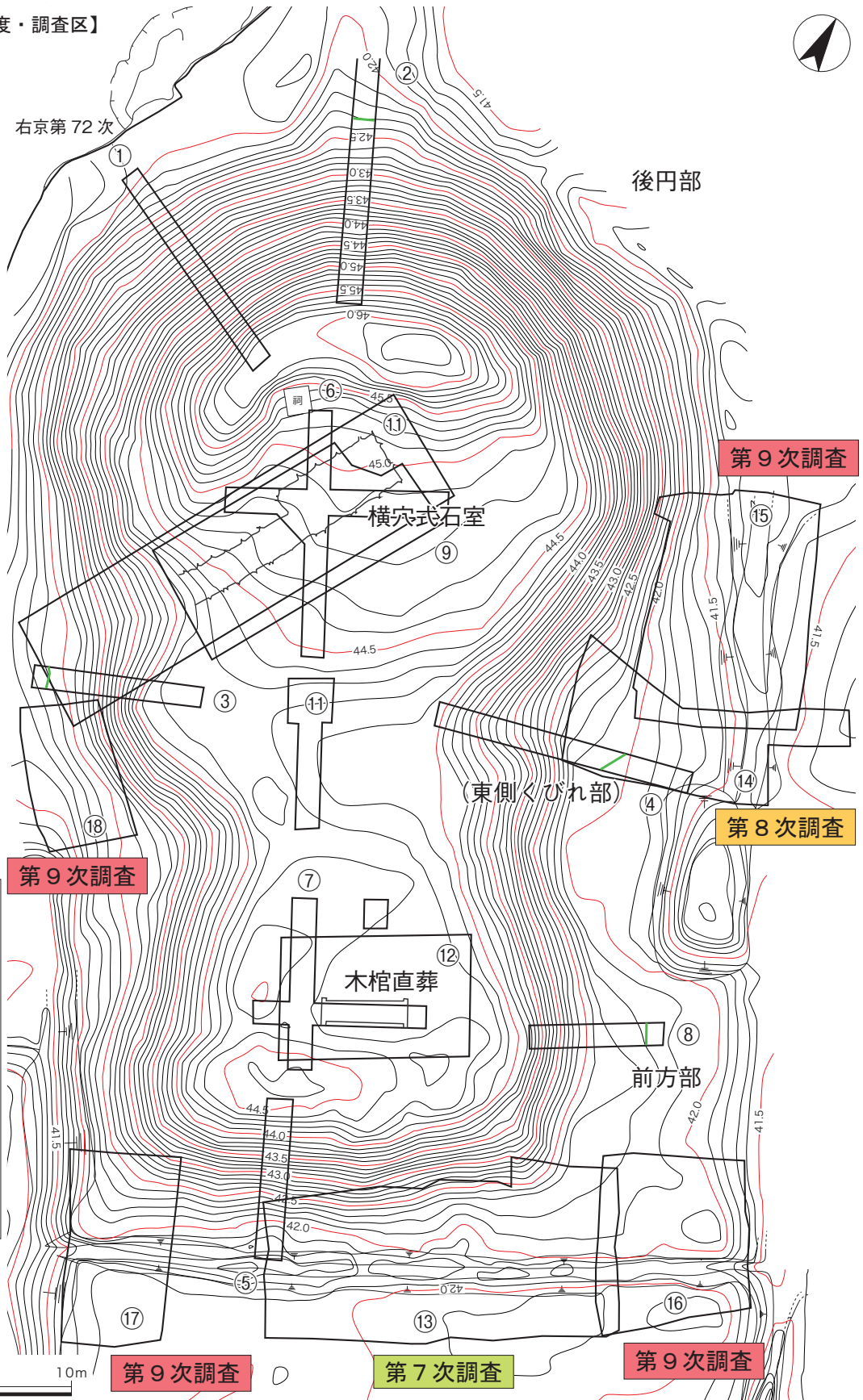
【調査回数・調査年度・調査区】

- ・第1次調査
平成5(1993)年度
- ① 後円部西側
- ② 後円部北西側
- ③ 西くびれ部周辺
- ④ 東くびれ部周辺
- ⑤ 前方部前面中央
- ・第2次調査
平成6(1994)年度
- ⑥ 後円部墳頂
- ⑦ 前方部墳頂
- ⑧ 前方部東側面
- ・第3次調査
平成7(1995)年度
- ⑨ 後円部石室
- ⑩ くびれ部墳頂
- ・第4次調査
平成8(1996)年度
- ⑪ 後円部石室
- ・第5次調査
平成9(1997)年度
- ⑫ 前方部97調査区
- ・第6次調査
平成28(2016)年度
- ※ 前方部東側の想定周溝範囲より東、墳丘図の範囲外

- ・第7次調査
令和5(2023)年度
- ⑬ 前方部前面南側
- ・第8次調査
令和6(2024)年度
- ⑭ 後円部南東側
- ・第9次調査
令和7(2025)年度
- ⑮ 後円部東側
- ⑯ 前方部前面東側
- ⑰ 前方部前面西側
- ⑱ 西くびれ部周辺

図左上の右京第72次調査は井ノ内稲荷塚古墳の調査回数に含まれない。

0 10m



第2図 井ノ内稲荷塚古墳の墳丘と調査履歴・調査区の配置(1/250)



△ 横穴式石室（南西から）



△ 馬具・雲珠

△ 金製刀装具

△ 矢を入れる胡籥の金具

△ 鉄鏃



△ 須恵器

写真2 大阪大学による横穴式石室の調査と副葬品(長岡京市教育委員会2002から)

横穴式石室(写真2左上)は、棺を納める玄室と、玄室への通路である細長い羨道に分かれており、最も重要な玄室が後円部のほぼ中央に位置するように設計されていました。石室の規模は全長約10m、玄室が長さ4.7m、幅2.2mを測ります。玄室の奥には、この古墳の主の本木棺が納められ、3回程度の追葬が行われています。

横穴式石室の副葬品には、装身具の碧玉製管玉や銀製耳環、武器類の金製刀装具・鉄刀・鉄剣・鉄鏃、矢を入れる道具の胡籥、馬具の鞍・鐙・轡などや、馬具飾りの雲珠・杏葉・金銅装板金具・鉾、農工具の鉄斧・鉋・刀子・針状鉄製品、須恵器、土師器などがあります。副葬品構成は装身具に比べ鉄製武器・武具・馬具が目立ちます。また、脚付壺・鈴付き甕・すり鉢など須恵器の種類も豊富でした(写真2)。

このように井ノ内稲荷塚古墳は、乙訓という歴史的に重要な地域にあって、地域首長墓の主体部構造や規模、副葬品を窺い知ることができる大変貴重な事例と言えるのです。

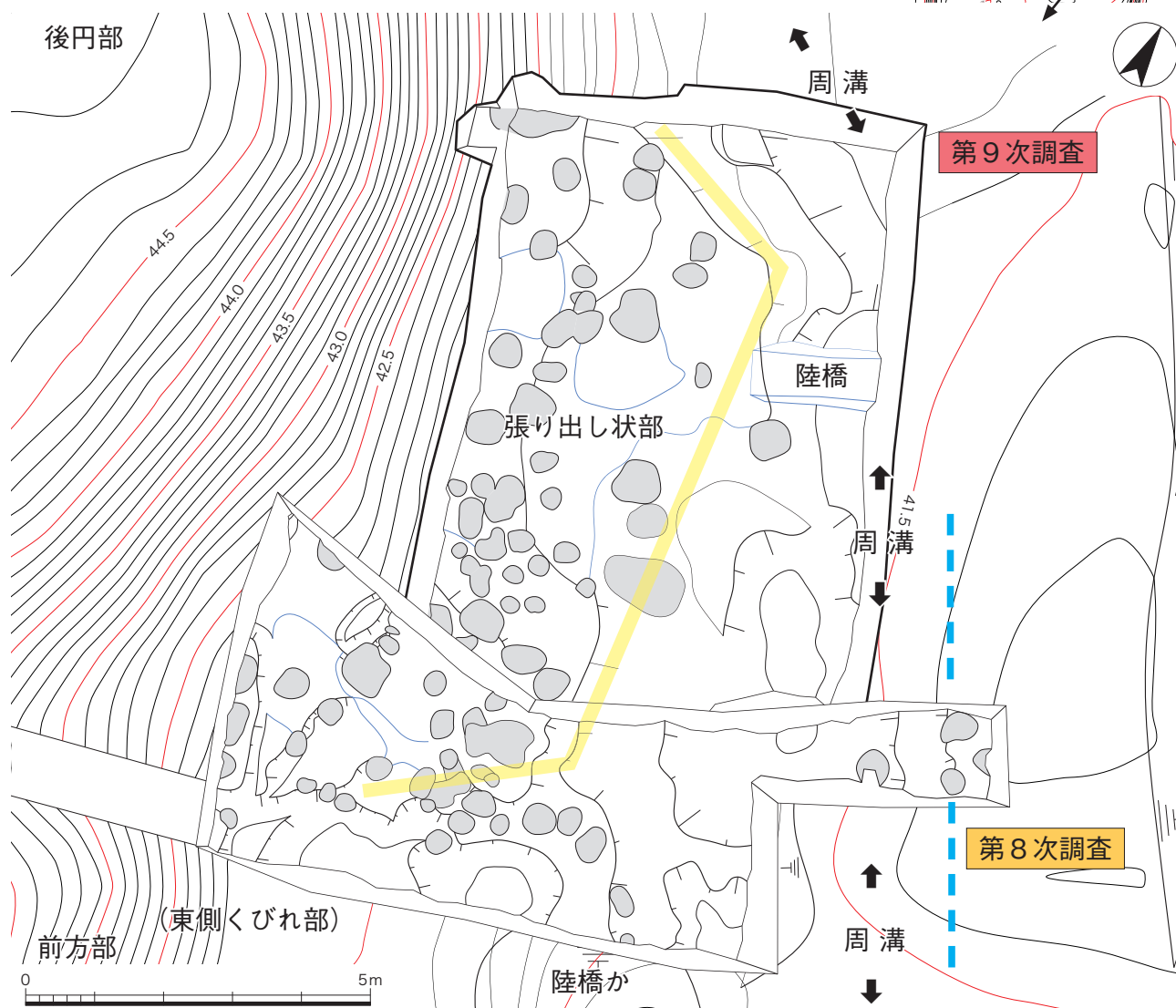
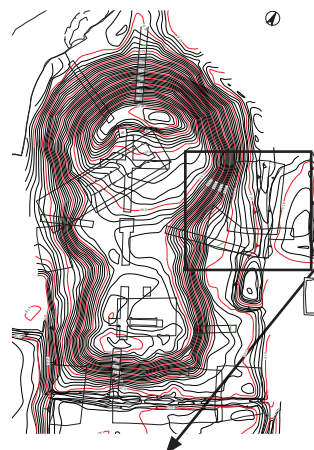
2. 井ノ内稲荷塚古墳に関する近年の調査成果

令和5(2023)年度から長岡京市では、情報が限られていた墳丘裾や周溝を中心^{ふんきゅうすそ しゅうこう}に井ノ内稲荷塚古墳の詳細な規模や範囲などを解明する目的で発掘調査を実施してきました。

(1) 後円部の調査 ～張り出し状部の発見(第3図)

後円部の南東側裾^{すそ}では現地表面に小規模な高まりが認められていたため、令和6・7年度に調査(第8・9次調査)を実施しました。

調査の結果、東側くびれ部より北側の後円部裾部に張り出し状部^{すそぶ はりだし}が設けられていることを明らかにしました。張り出し状部は地山の礫層^{れきそう}を掘り残したもので、上面の規模が南北約9m、南東側への突出が約3mを測ります。上面には後世の小穴や土坑などが数多く^{とっしゅつ}穿たれており、樹木の根によって形状がやや乱されていました。



第3図 後円部南東側の張り出し状部と周溝(1/100)※灰色網掛けは後世の遺構

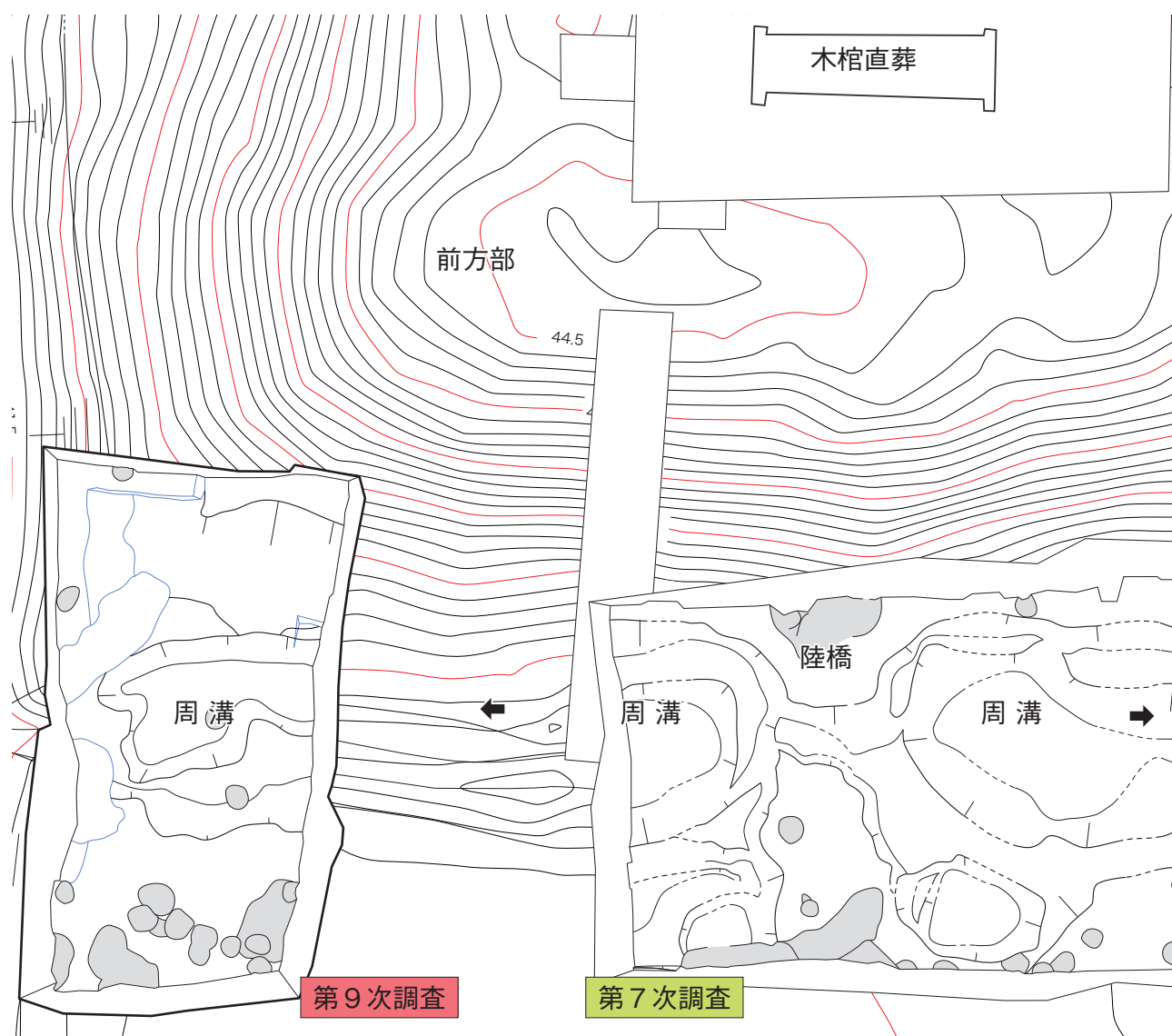
張り出し状部周辺の周溝は深さが一定ではなく、北東隅と南東隅が浅く陸橋状^{りっきょう}となっていました。また、トレンチ北半では周溝の底が後円部裾^{しやこう}に向かって斜行^{しやこう}しています。

張り出し状部には埴輪や供献土器が伴っていませんが、直前の地域首長墓である井ノ内車塚古墳との関連を考える上で非常に重要な発見と言えます。

(2) 前方部の調査 ～陸橋の発見と前面東端部の状況(第4図)

前方部前面の周溝を確認するため、令和5・7年度(第7・9次調査)に実施しました。

調査の結果、前方部前面の周溝を確認することができました。周溝は最大幅約3mを測り、最深部は南側の地山面より50cm程度掘り下げられています。周溝の断面形状は前方部側が急峻^{さいしん}に立ち上がるのに対し、古墳の外である南側へは緩やかな傾斜^{きゅうしゆん}で肩部が不明瞭^{ゆる}でした。

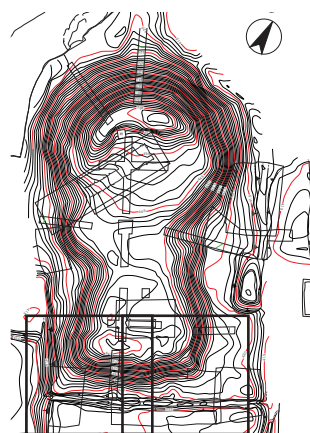


第4図 前方部前面中央の陸橋と周溝(1/100)

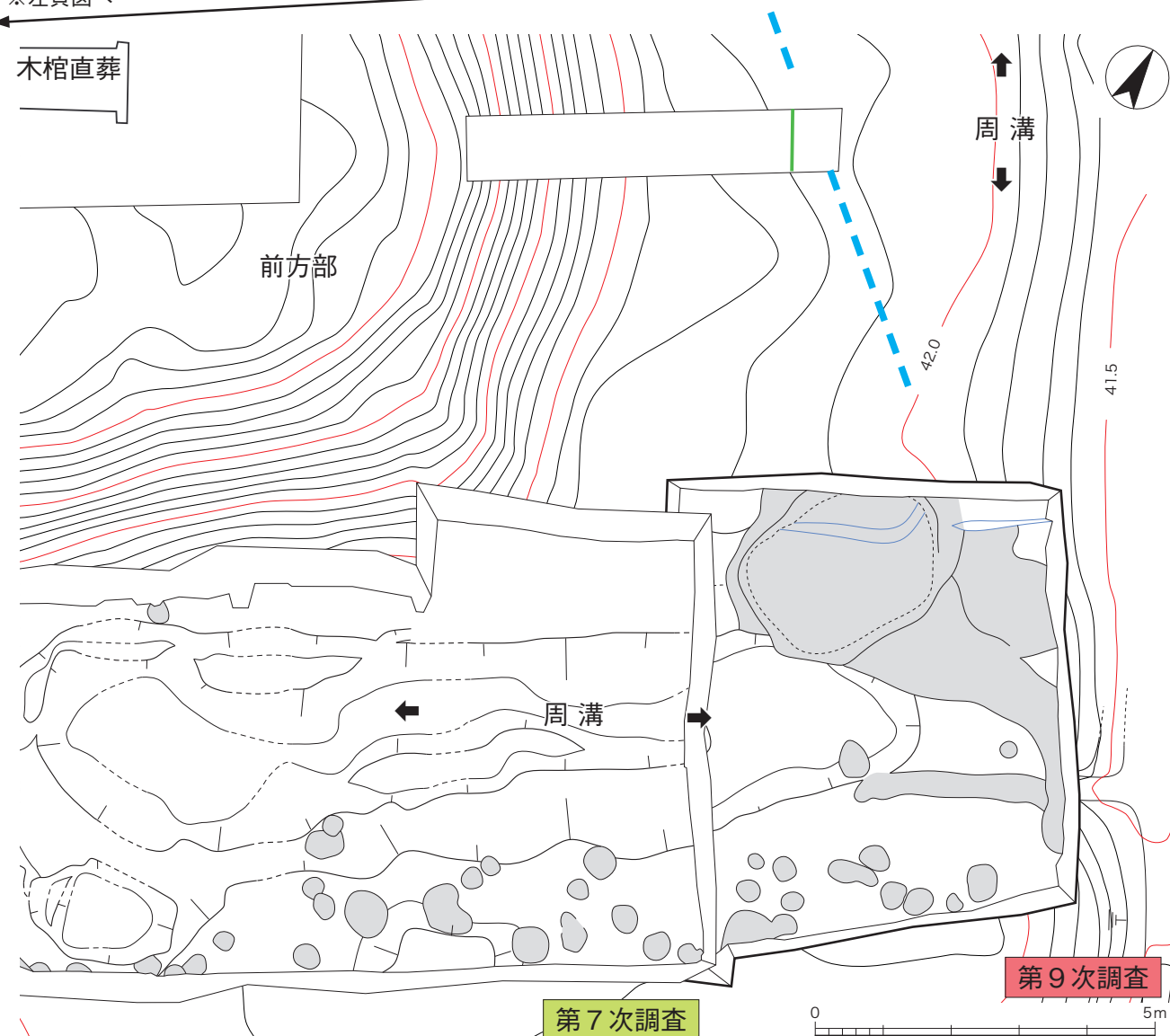
前方部前面周溝では、井ノ内稲荷塚古墳を特徴付ける、2つの調査成果がありました。

1つ目は、前方部前面周溝が古墳のほぼ主軸上^{しゅうじく}に当たる部分(中央部)を掘り残していたことです(図4左頁)。地山が掘り残された幅は1.5m程度で、この部分が前方部へ^{つな}繋がる陸橋であったと考えられます。さらに陸橋の南側には、長辺2.5m程の四角い穴が両側に2基穿^{うが}たれており、この部分が特別な意味をもっていたことを示唆^{しさ}しています。

2つ目は、前方部前面の周溝が東端部の手前^{とうたん}で収束^{しゅうそく}していたことです(第4図右頁)。前面の周溝は前方部東側面の周溝と接続せず、推定される前方部南東端の地山が掘り残されています。このように周溝の各所を掘り残すことが特徴の一つと言えます。



※左頁図へ



※灰色網掛けは後世の遺構

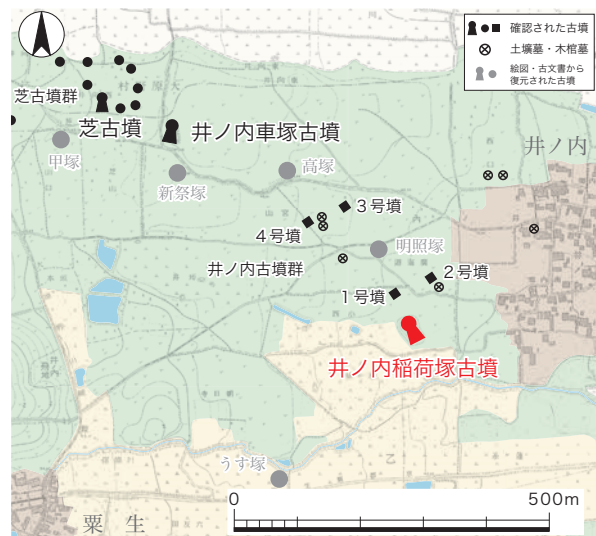
3. まとめ

(1) 井ノ内稲荷塚古墳の復元

近年の発掘調査により、井ノ内稲荷塚古墳は後円部南東側に張り出し状部を設けること、浅い周溝を巡らせるとともに前方部端などの周溝を途切れさせていることが明らかになりました。とくに前方部前面周溝の中央に設けられた陸橋は古墳の主軸に当たるため注目されます。

(2) 井ノ内車塚古墳との比較(第5～7図)

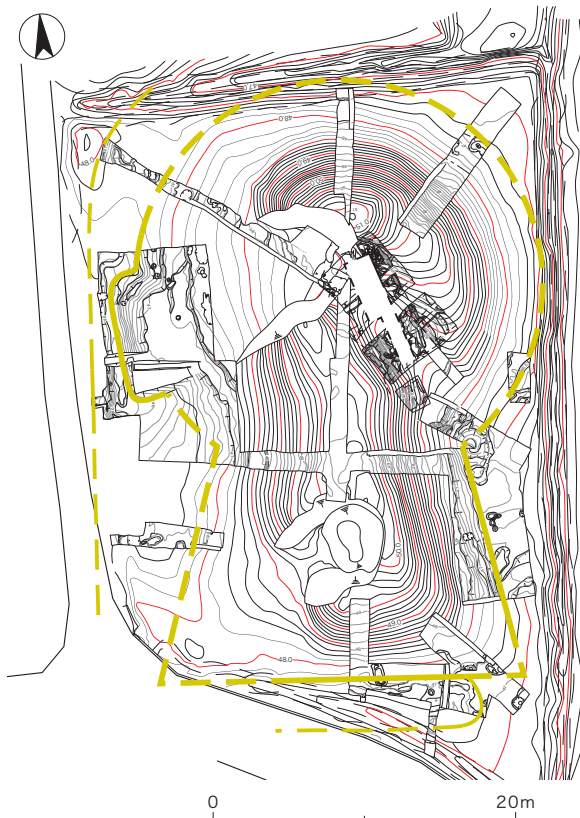
井ノ内稲荷塚古墳の北西側に延びる微高地に



第5図 井ノ内稲荷塚古墳と周辺の古墳(1/12000)

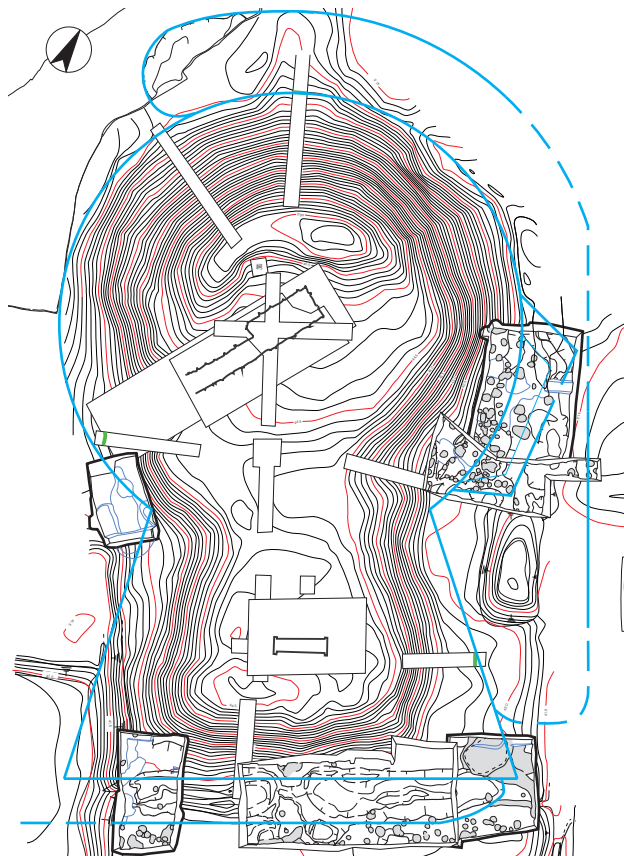
井ノ内車塚古墳

- ・全長約 40 m
- ・左片袖式横穴式石室（南東へ開口）
- ・後円部の南西側に造り出し
- ・造り出しは盛土で付け足す
- ・造り出しに多種の形象埴輪

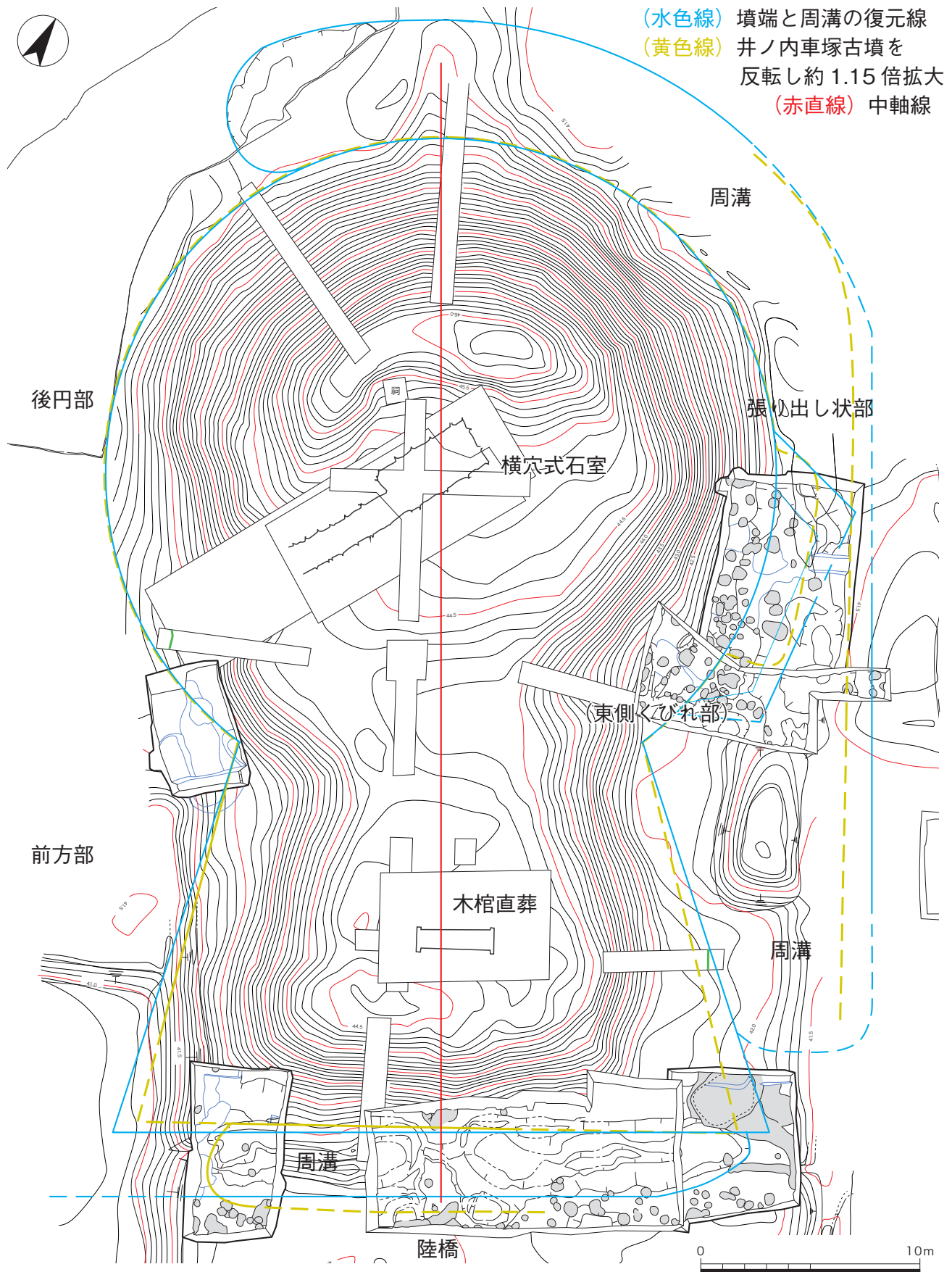


井ノ内稲荷塚古墳

- ・全長約 46 m
- ・左片袖式横穴式石室（南西へ開口）
- ・後円部の南東側に張り出し状部
- ・張り出し状部は当初から削り出し
- ・埴輪無し



第6図 井ノ内車塚古墳と井ノ内稲荷塚古墳の墳丘(1/500)



第7図 井ノ内稲荷塚古墳の墳丘復元(1/250)

は中期末から終末期までの古墳が数多く残されています。とくに芝古墳・井ノ内車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳という3基の前方後円墳が相次いで築かれている点は、後期前半（6世紀前半）という時期にこの地域の首長が非常に安定した勢力を有していたことを端的に示しています。

井ノ内稲荷塚古墳の墳丘裾部を中心とした調査成果から注目されるのは、井ノ内車塚古墳との類似性です。井ノ内車塚古墳は、井ノ内稲荷塚古墳の北西約500mに所在する全長約40mの前方後円墳で、井ノ内稲荷塚古墳より少し古い時期に築かれています。井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳は、後円部の南側に付属施設（井ノ内車塚古墳は造り出し、井ノ内稲荷塚古墳は張り出し状部）を伴うこと、浅い周溝を巡らせるとともに前方部前面端を途切れさせることなどに類似性を見出せます。

さらに重要な事実、付属施設や周溝の類似性だけでなく、両古墳の全長・後円部径・前方部長・幅の数値比率がほぼ同じであることです。第7図では、井ノ内稲荷塚古墳の墳丘測量図・復元図（水色線）に1.14倍拡大し左右反転した井ノ内車塚古墳の復元図（黄色線）を重ねて示しました。後円部の裾、前方部の前面（全長）や前方部の開き具合（くびれ部幅や前方部幅）が非常に近いものになることが分かります。また、左右反転させているのは、両古墳の横穴式石室の開口方向が異なるためですが、いずれの古墳でも開口方向の反対側の後円部に付属施設が設けられています。こうしたことから、井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳は同じ「設計図」を使って築造された、言い換えれば両古墳の比較から現代まで残されることがなかった「古墳設計図」の存在を想像することができるのではないのでしょうか。

井ノ内稲荷塚古墳は、井ノ内車塚古墳の「設計図」を拡大し、左右反転して築かれたと推定しましたが、両古墳には大きな相違点も認められます。それは、井ノ内車塚古墳の造り出しが後円部周溝の掘削後に盛土されたものであるのに対し、井ノ内稲荷塚古墳の張り出し状部が周溝の掘削時に地山を掘り残して形成されている点です。また、井ノ内車塚古墳の造り出しが数多くの形象埴輪や供献土器を伴っていたのに対し、井ノ内稲荷塚古墳の張り出し状部では埴輪や供献土器が一切認められません。僅かな時期差ではあるのですが、古墳に伴う祭祀が大きく変化したことを示す事例とも言えます。

＜参考文献＞

京都府教育委員会2015『乙訓古墳群調査報告書』

長岡京市教育委員会2002『長岡京市文化財調査報告書』・井ノ内稲荷塚古墳の報告書

長岡京市教育委員会2021・2024『長岡京市文化財調査報告書』・井ノ内車塚古墳の報告書

国史跡綴喜古墳群と南山城の前期古墳

京都府教育委員会指導部文化財保護課 桐井理揮

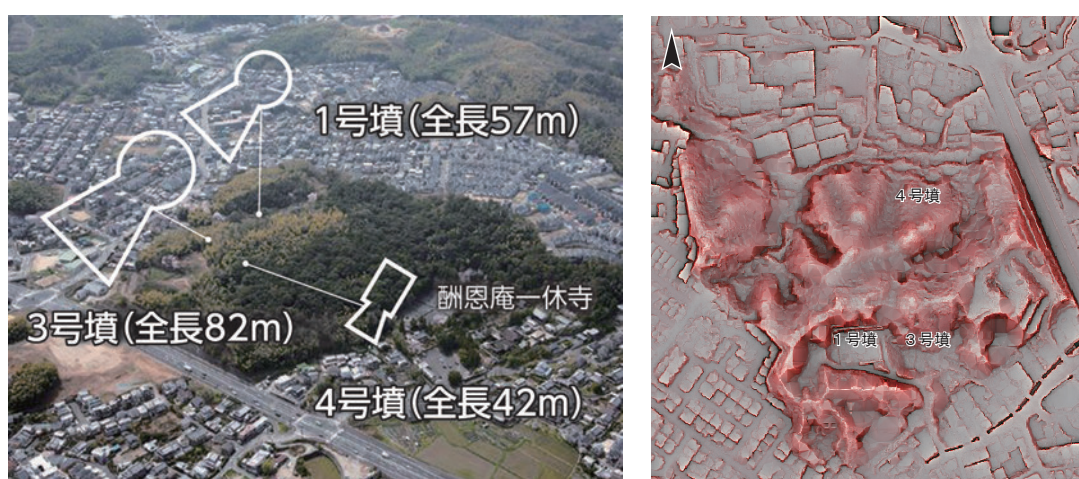
1. 天理山古墳群の「再発見」

古墳といえば、鍵穴のような「前方後円墳」を思い浮かべる人は多いと思います。全国の大きな古墳の上位100基のうち、98基は前方後円墳で占められています。ところが、古墳の総数で言えば、全国に約16万基あるうち、ほとんどを小規模な円墳や方墳が占めています。前方後円墳はわずか3%に過ぎず、新たに見つかることはめったにありません。

しかし、2021年、京都府南部の京田辺市で新たな前方後円(方)墳が3基も発見されるという珍しいニュースが報じられました。その3基は京田辺市新にある「天理山古墳群」の1、3、4号墳。いずれも6世紀の円墳と考えられていました。宅地造成の計画が持ち上がったため、京田辺市が試掘調査したところ、1、3号墳は前方後円墳、4号墳は前方後方墳と分かったのです。

試掘前の3号墳は、前方後円墳の「後円部」のみが認識され、円墳とみなしてきましたが、実は全長82mもある大きな前方後円墳だったと分かりました。その北にある4号墳は全長42mの前方後方墳であり、旧綴喜郡では最古の古墳であることも判明しました。

この成果を受け、京都府と京田辺市は古墳を保存するために、急ピッチで天理山古墳群



左：天理山古墳群の現況（北東から撮影）（京田辺市 HP から引用）

右：天理山古墳群の微地形表現図（京都府オープンデータを使用して筆者作成）

の報告書（京田辺市2022）、そして八幡市教育委員会の協力で、天理山古墳群を含めた旧綴喜郡一帯にある古墳群の報告書（京都府教育委員会2022）作成に着手しました。その結果、天理山古墳群を含め、京田辺市と八幡市一帯に位置する古墳のうち、条件が整った6基が、2022年6月に「綴喜古墳群」として国指定史跡として保護されるよう^{とうしん}答申されました。

天理山古墳群の「再発見」からわずか1年余り。新発見の3基の古墳は開発の危機を間一髪で免れ、保存されることとなりました。

2. 綴喜古墳群とは

新たに史跡となった綴喜古墳群。あまり聞き慣れない方も多いのではないのでしょうか。それもそのはずです。綴喜古墳群というのは、2022年の報告書で初めて世に出た名前です。というのも、これまでも京田辺市・八幡市域に4世紀の古墳が多くあることは分かっていたのですが、一つのまとまりとしては考えられていなかったのです。それが、天理山古墳の再発見により、30基程度の古墳をひとまとまりの古墳群として^{とら}捉えられるようになりました（第2図）。これらの古墳は旧綴喜郡に分布していることから、「綴喜古墳群」と命名されました。現在、国史跡に指定されているのがこのうちの6基です。

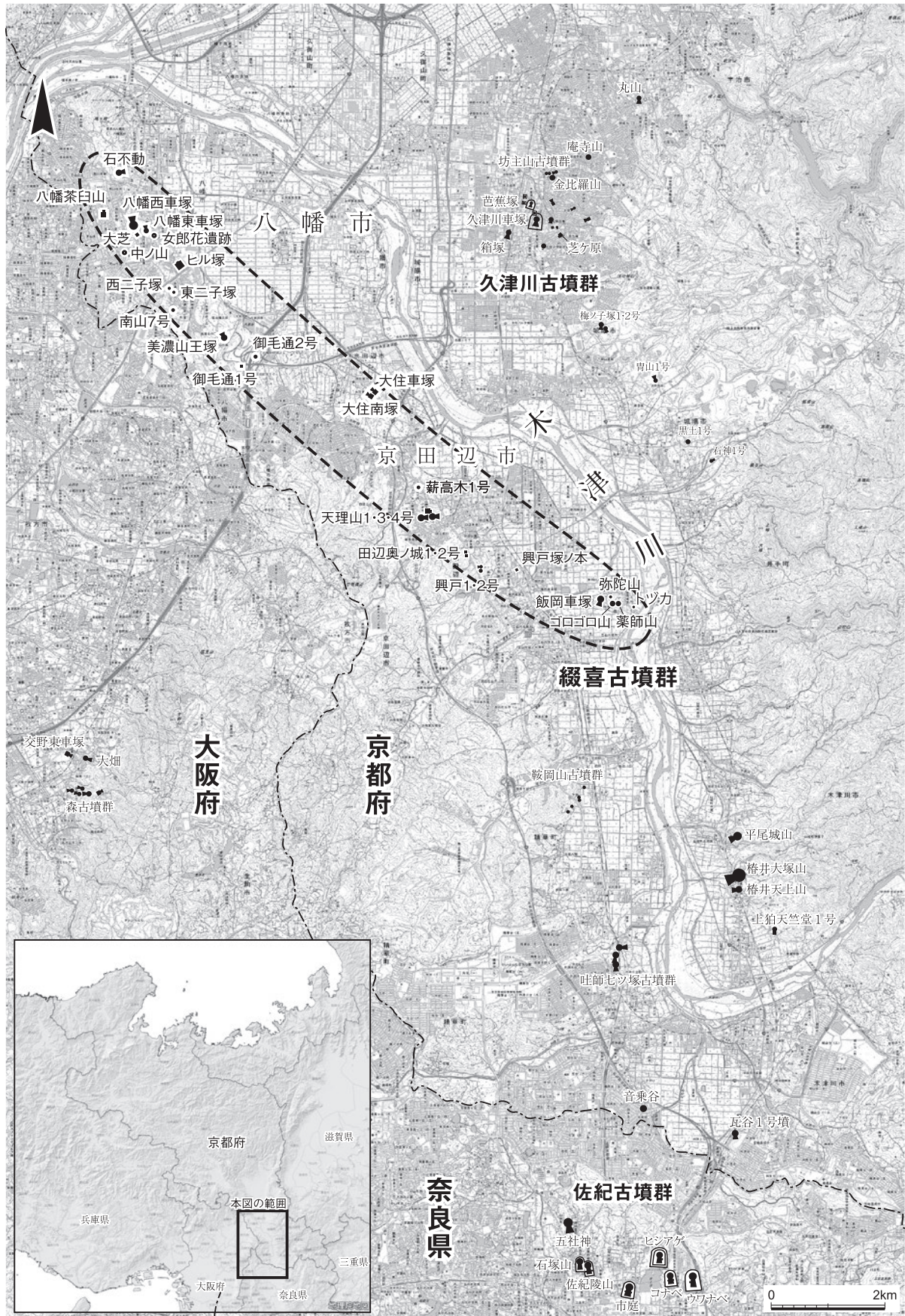
この一帯に古墳が多くあることは古くから知られていました。例えば、江戸時代の「^{さんしゅうめいせきし}山州名跡志」などの地誌には、^{いのおかくるまづか}飯岡車塚古墳や^{とづか}十塚（トヅカ）古墳の記載があります。

明治・大正時代になると、開墾や開発の増加によって、綴喜古墳群のうちトヅカ古墳、ヒル塚古墳、西車塚古墳、中ノ山古墳などが相次いで発掘され、埋葬施設から多くの遺物が持ち出されました。1915年には京都府南部から奈良県北部の古墳が次々と盗掘され、新聞等でも大きく報じられるという事件まで起こっています（奈良国立博物館2018）。

このような状況の中、1919年には京都府^{しせきしやうちやうさかい}史跡勝地調査会による調査が始まり、古墳の現状の確認と保護のための調査が行われました。この時の調査では、^{さんいつ}散逸してしまった遺物の調査と、古墳の現状の確認が進められました。

戦後は、^{やわたちゃうすやま}八幡茶臼山古墳の発掘調査や^{おおすみくるまづか}大住車塚古墳の測量調査が実施されるなど、一部の古墳の調査が行われ、大住車塚古墳は1974年に国指定史跡となっています。しかし、幸いにも古墳が破壊されるという危機に直面することがなかったためか、^{おとくに}乙訓古墳群や^{くつかわ}久津川古墳群で盛んに実施されてきたような学術調査は行われませんでした。そのため、全国的にも著名な古墳がありながら、発掘調査が実施されていないために実態がよくわからない、という状況が続いていたのです。

状況が一転したのが、天理山古墳群の発見でした。天理山古墳群が見つかったことで、京都府と八幡市、京田辺市は改めて旧綴喜郡一帯にある古墳の再検討を行いました。その



第2図 綴喜古墳群と南山城の前・中期の古墳(京都府教育委員会2022)

結果、4世紀後半から5世紀前半のおよそ100年の間に集中して30基以上の古墳が造られていること、古墳群は地理的・時期的にまとまりがあるだけではなく、いくつかの共通した歴史的な特徴があることがわかりました。

例えば、古墳の埋葬施設の主軸方位に注目してみましょう。古墳時代前期の近畿地方の古墳は、中国の思想の影響で埋葬施設の方位が南北方位となるものがほとんどです。そのような中であって、綴喜古墳群のうち特に八幡市域の首長墓は、埋葬施設の主軸が東西方位を取ることがわかっていました(下垣2021)。これを綴喜古墳群全体でみた時、飯岡車塚古墳など南北主軸を採用する古墳もあるものの、新たに見つかった天理山古墳群を含め、東西主軸が優位となっています。府内に目を広げると、旧久世郡くせぐん、旧相楽郡そうらくぐんでは、南北主軸の古墳が主体で、東西主軸の埋葬施設は副次的な埋葬施設または小型墳の埋葬施設に限定されます。つまり、東西主軸の埋葬施設は、首長墓では綴喜郡西部の八幡市域、京田辺市域にまたがる綴喜古墳群に限定して採用されており、綴喜古墳群を造営した勢力で共有された決まりであった可能性が高いと考えられます。

また、綴喜古墳群で首長墓群の築造がピークアウトしたのち、すなわち6・7世紀、の墓制に注目すると、綴喜古墳群の分布範囲では横穴墓が多数築造されるという共通の傾向が認められます。南山城で横穴墓が集中するのは旧綴喜郡だけの特徴です。

ほかにも、古代の交通路や古墳時代の集落の様相など、多角的な側面から検討を行った結果、古墳時代前期から古代に至るまで、綴喜古墳群の分布範囲が完結した一つのまとまりであることが明らかになったのです。

3. 綴喜古墳群の盛衰

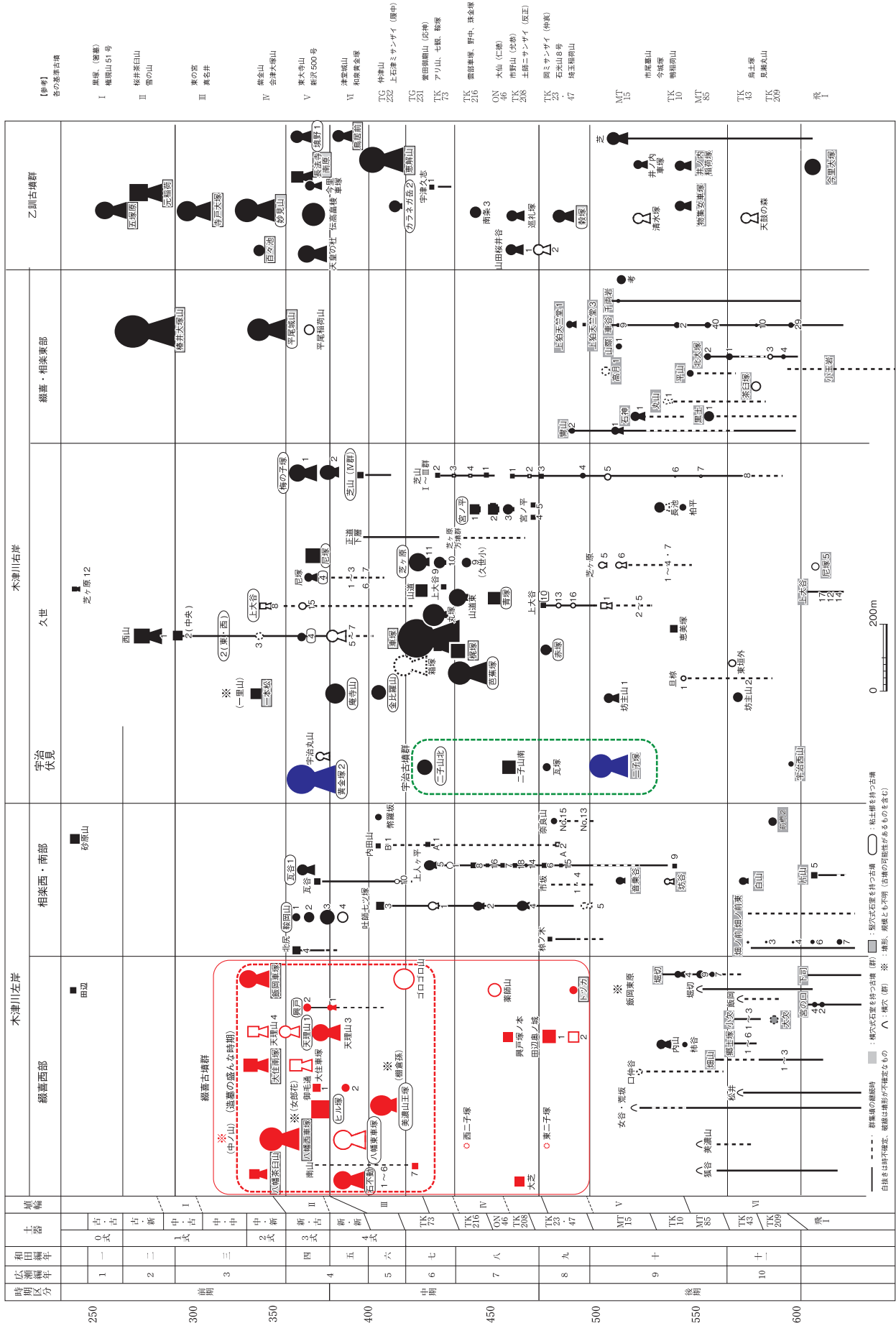
(1) 綴喜古墳群出現期-古墳時代前期前半-

では、綴喜古墳群を構成する古墳を、時期が古いものから見ていきましょう。

木津川左岸地域では、興戸こうど5号墳下層墓など弥生時代後期(2世紀)の墳丘墓はいくつか見つかっています。それに続く弥生時代終末期(2世紀後半～3世紀前半)の墳丘墓としては、鉄剣と加飾壺が出土した田辺遺跡墳丘墓1(第5図③)があります。ここから出土した土器は城陽市芝ヶ原しばがはら12号墓と共通した特徴があり、古墳出現前夜のものです。

古墳時代前期前半(3世紀後半)になると、府内では、木津川市樺井大塚山古墳つばいおおつかやまや、向日市五塚原古墳いつかはらなど最初期の古墳が出現しますが、綴喜古墳群ではこの時期の古墳は今のところ見つかっていません。

綴喜古墳群で古墳造りが始まったのは、古墳時代前期中頃(4世紀半ば)のことです。天理山4号墳(前方後方墳、全長42 m)は、地山を削り出して墳丘を作り、段築・埴輪列を



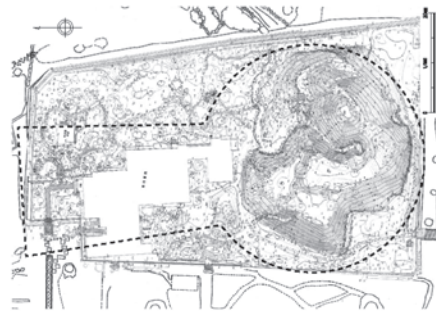
第3図 京都市南部の古墳編年(京都市教育委員会2022を改変)



①飯岡車塚古墳の墳丘は茶畑となっている。



②大住南塚古墳（右）と大住車塚古墳（左）。2基の前方後方墳が並ぶ景観は全国的にも珍しい。



③八幡東車塚古墳の墳丘は、松花堂庭園の築山として利用されている。

第4図 綴喜古墳群を構成する古墳の例(京都府教育委員会2022から作成)

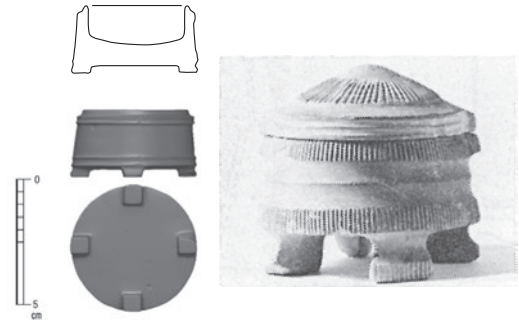
もたないなど、古い古墳に多くみられる特徴が認められます。副葬品^{ふくそうひん}は出土していませんが、埋葬施設の上で見つかった土師器^{はじき}の年代から、4世紀中頃(布留2式)の古墳と考えられ、京田辺市域では最古の古墳です。飯岡車塚古墳^{いのおかくるまつか}(前方後円墳、全長90m、第4図①)は、京田辺市域では最も大きい古墳です。明治時代に発掘され、堅穴式石室から碧玉製の腕輪^{たてあなしきせきしつ}形石製品や合子^{ごうす}といった副葬品^{へきぎよく}が出土しました。墳丘の調査では、前期中頃によくみられる楕円形の円筒埴輪^{おおすみなみづか}が出土しています。同様の円筒埴輪を含むセットは、大住南塚古墳(前方後方墳、全長71m、第4図②)でも出土しており、いずれも天理山4号墳とほぼ同時期か、わずかに新しい古墳と考えられます。

八幡市域では同じ時期に、八幡茶臼山古墳(前方後方墳、全長50m)が造られました。堅穴式石室の中で見つかった舟形石棺は、熊本県に産する阿蘇溶結凝灰岩^{あそようけつぎょうかいがん}という石材を使用しており、被葬者は瀬戸内海を通じて広い交流関係を有していたと考えられます。また、今は墳丘がなくなっていますが、中ノ山古墳(墳形全長不明、第5図①)ではかつて腕輪形石製品や埴輪が出土したことが今回の再調査で判明し、八幡市域では最古の古墳である可能性が高まりました。

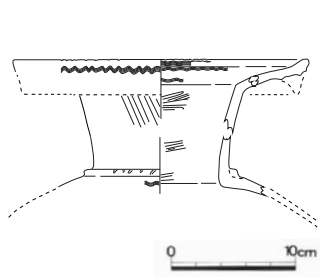
これら5基の古墳のうち、埋葬施設の発掘調査が行われていない中ノ山古墳と天理山4号墳以外は、埋葬施設が堅穴式石室で、段築^{ふきいし}、葺石、埴輪という定型化した古墳に見られ



①八幡市内最古の古墳とみられる中ノ山古墳では多様な石製品が出土している。(京都工芸繊維大学蔵)



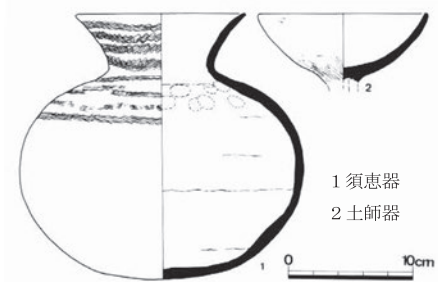
②飯岡車塚古墳(左)と八幡西車塚古墳(右)では珍しい石製の合子が出土している。(諫早ほか 2023)



③田辺遺跡では、弥生時代末の墳丘墓から土器と鉄剣が出土した。(池田 2023 を参考に作成)



④ヒル塚古墳の埋葬施設(粘土槨)からは、朝鮮半島系と考えられる渦巻状飾付の鉄剣が出土した。



⑤府道建設に伴い、初期須恵器を伴う小規模な埋没古墳(南山 7 号墳)が見つかった。



⑥美濃山王塚古墳では、多種多様な銅鏡が 12 面出土したと伝わる。(京都府 1920)

る外表施設を備えており、綴喜古墳群は出現当初から畿内中枢部の影響下で築造された古墳と考えられます。

(2) 大型古墳の築造－4世紀後半から5世紀初め－

4世紀後半になると、八幡市北部の男山丘陵で八幡西車塚古墳（前方後円墳、全長120 m）、石不動古墳（前方後円墳、全長88 m）、八幡東車塚古墳（前方後円墳、全長90 m、第4図③）の3基の大型前方後円墳が相次いで築造されます。八幡西車塚古墳は、明治35（1902）年に土木工事を行った際、後円部の小石室内から舶載鏡、倭製鏡、玉類などが出土したことが報告されています。副葬品が出土した埋葬施設以外に粘土槨の一部が見つっているほか、中心部にも埋葬施設があると考えられます。なお、八幡東車塚古墳は現在の松花堂庭園の中にあります。墳丘が庭園の築山に再利用されている珍しい古墳です。

八幡西車塚古墳、石不動古墳、八幡東車塚古墳がどのような順序で築造されたのかは研究者によって意見は分かれていました。今回の再調査で、これらの古墳から過去に出土した遺物を詳細に検討した結果、4世紀後半に八幡西車塚古墳がまず築造され、その後5世紀初頭までに石不動古墳と八幡東車塚古墳が相次いで築造されたことがわかりました。

そのほか、八幡市南部では有力な円墳、方墳が見つっています。ヒル塚古墳（造出し付方墳、1辺52m、第5図④）では、朝鮮半島製と見られる渦巻き状の飾りがついた鉄剣が見つっています。また、美濃山王塚古墳（造出し付円墳、全長76m、第5図⑥）でも12面の銅鏡のほか、朝鮮半島製とされる鉄製の冑が出土しており、近接する2基の古墳の出土品に朝鮮半島由来の遺物が出土する珍しい事例です。

京田辺市域では、天理山3号墳（前方後円墳、全長82m）をはじめ、天理山1号墳（前方後円墳、全長57m）、興戸1号墳（前方後円墳、全長24m）、興戸2号墳（円墳、直径28m）、ゴロゴロ山古墳（円墳、直径60m）が相次いで築造されました。

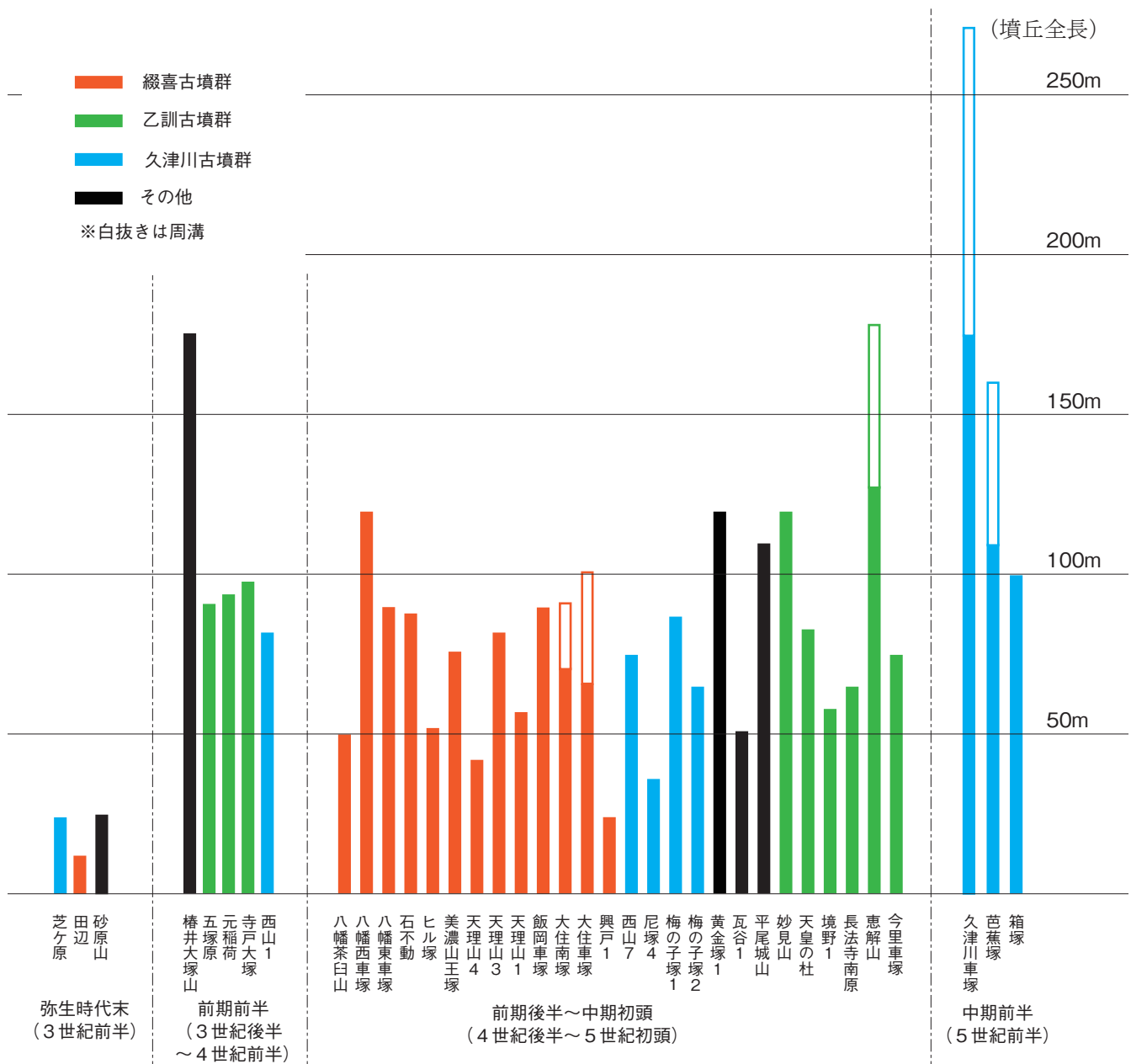
天理山3号墳は、令和3年の再発見以来、京田辺市が継続的に発掘調査を実施しており、3段築成の墳丘全面に葺石を葺き埴輪を巡らせた、立派な古墳であったことが徐々にわかってきています。大住車塚古墳（前方後方墳、全長66m、第4図②）は大住南塚古墳の北東約60mの地点にあります。ほぼ同時期・同規模の前方後方墳が2基並ぶのは全国的にも珍しい事例です。すぐ南には陪塚と見られる姫塚古墳が付属します。

この時期は大型古墳だけでなく、南山古墳群（第5図⑤）、御毛通古墳群といった、小規模の埋没古墳が八幡丘陵から田辺丘陵に多くあったことが発掘調査で見つっています。これらの古墳は大型の前方後円（方）墳の被葬者たちの縁者や官僚層が築いた墓と考えられます。

4. 群雄割拠から久津川古墳群へ

少し目線を広げ、南山城の古墳の動向をみていきましょう。

古墳時代前期前半（3世紀後半～4世紀初頭）の古墳は、木津川市椿井大塚山古墳（前方後円墳、全長176m）や、向日市五塚原古墳（前方後円墳、全長91m）、同元稲荷古墳（前方後方墳、全長94m）、城陽市西山1号墳（前方後方墳、全長82m）など、各郡に1基程度しかありません。弥生時代終末期（3世紀前半）の墳墓の全長が25m程度に過ぎないことを考えると、これらの古墳は規模の大きさが際立っています。初期の古墳は、椿井大塚山古墳を頂点として、ヤマト政権成立期において重要な役割を果たした、各地域の「首長墓」と評価できるでしょう。



第6図 山城における前方後円(方)墳の大きさ(造出し付方墳・円墳を一部含む)

古墳時代前期後半（4世紀中頃～後半）になると、少し状況が変わってきます。綴喜古墳群をはじめ、各地域で古墳が同時多発的に造られるようになるのです。ただし、全長100mを超す大型古墳は綴喜古墳群では八幡西車塚古墳の1基のみ。木津川右岸や乙訓に範囲を広げても、京都市伏見区^{こがねづか}黄金塚1号墳（前方後円墳、全長推定120m）や長岡京市^{いげのやま}恵解山古墳（前方後円墳、全長120m）が最大規模で、全長50～100m程度の中規模古墳ばかりです。これは南山城において、前代と異なる勢力が新たに台頭したことや、力関係の移り変わりがあったことを示しています。4世紀後半の南山城は、同程度の勢力がしのぎを削る群雄割拠の状況になっていったのでしょう。その中でも特に古墳が集中するのが綴喜古墳群です。

この時期、奈良の巨大古墳の分布の中心が、大和盆地東南部の^{おおやまと}大和古墳群から、京都府と奈良県の境界近くの^{さき}佐紀古墳群へと移動しており、ヤマト政権内部でも勢力交代があったと考えられます。同じ時期に造墓活動がピークを迎える綴喜古墳群は、ヤマト政権で新たに台頭した勢力との繋がりを背景に力をつけた、前期後半の政治情勢を如実に示す古墳群といえるのです。

そして5世紀中ごろ、府内最大の城陽市久津川車塚古墳が築造されました。二重の^{ほり}濠を含めると全長が272mになる巨大古墳で、並び立つ古墳は府内にはありません。群雄割拠の状況は終わり、南山城全域に影響力をもつ大首長が再び現れたことを物語っています。

5. まとめ

このように、綴喜古墳群は古墳時代前期から中期の政治状況を^{にょじつ}如実に反映した古墳群と評価できます。これらの古墳は現在、各市町が中心になり発掘調査が行われ、活用の検討が進められています。今後、より実態の解明が進むことを期待したいと思います。

【参考文献】

- 池田野々花2023「京田辺市田辺遺跡の古墳出現期木棺墓」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号、京都府立大学文学部
- 諫早直人・初村武寛・二村真司2023「京田辺市飯岡車塚古墳出土石製品の3Dスキャン」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号、京都府立大学文学部
- 京田辺市教育委員会2022『天理山古墳群発掘調査報告書』
- 京都府教育委員会2022『綴喜古墳群調査報告書』
- 下垣仁志2021「男山古墳群の動向」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権』季刊考古学・別冊34 雄山閣
- 奈良国立博物館2018『北和城南古墳出土品調査報告書』



第 159 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 8 年 3 月 7 日（土）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<https://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877（代表） Fax (075) 922-1189



FB



X